2005. 11. 23

支配者の孤独～ バッハ「マタイ受難曲」

人類全体をひとりの人間としてみたとき、彼の孤独は実に深い。

人類は、自然を支配し、地球上のあらゆる生命体の頂点に立ち、地上を、彼自身の創造物で埋め尽くし、その中で暮らしている。我々は、自らが創造した、実に「わかりきった」、何らの神秘性のない世界に取り巻かれている。友情も、愛もなく。語りかけても、自らプログラムした答えが返ってくるばかりで、何も語りかけてはくれないのと同じこと・・・。果てしのない自問自答が続くばかりなのだ。

それは神の孤独と同じである

かつて神は、自らに似せて人類を作り、地上に送り出した。それは神が、絶対的支配者としての孤独に耐えられなかったからに他ならない。自らの「わかりきった」創造物に取り巻かれた、支配者としての孤独――― それを断ち切るために残された道とは、神の支配を脱し得る存在を生み出すこと。すなわち、己を超える存在を生み出す、という危険極まりない、しかも同時に、実に魅惑的な試みだったのである。

ニーチェは「ツァラツストラはかく語りき」の中で、神が死んだ（滅んだ）ことを告げた。しかし、アダムとイブを生み出したとき、既に神は、孤独よりも「死」を選んでいたと言えるのかもしれない。それを決定的にしたことこそ、イエスの誕生なのだ。その死と復活によって、神と人類は肩を並べる存在と認められ、同時に、神と人類が「父と子」となり、それによって両者の決別の運命が予定された、と言えるのではないだろうか。

人類は今、支配者となり、この世界を支配していながら、己の創造物を撒き散らし、それに取り巻かれながら、自室でソファにゆったりと身を沈めている。そして、同時に、それら創造物との対話に嫌気が差し、刺激的な関係を与えてくれる存在を渇望し、孤独に喘いでいる。

人類は、既に死した神と同様に、己を超える可能性を秘めた存在を、自らの手で生み出すことになるのだろうか。己の死、滅亡をも覚悟の上で・・・。

マタイ受難曲は、イエスの受難の物語を切々とうたっている。
私は、この曲を聞くと、何らの喜びをももたらさぬ支配者としての無意味な地位を棄て、死を覚悟の上でイエスを遣わした神自身の孤独と、父が子をひとり立ちさせるための、苦渋に満ちた、同時に心安らぐ「決別のとき」を感じる。